

性を調査する
—性的冒険主義に見る主体とリスク—

一橋大学大学院社会学研究科 博士後期課程

日本学術振興会特別研究員

大島 岳

1 目的

ライフストーリー研究の一つの強みは、社会の周縁にいる人びとの経験に着目することで、支配文化の枠組みとは異なる生き方やメッセージを伝え、それによって社会の不平等や偏見を捉え返すことができる点にある。しかし周縁に身を置く人びとは、安全や健康の不平等に晒されることが多く、フィールドワークを通じ生きられた経験に接近を試みようとする、調査者も偶発的に危険に遭遇することも少なくない。所々の場面では、常に参入するか撤退するかを決断を迫られることとなる。

特に性に関しては、異性愛主義が覇権的な地位を占めるほとんどの社会では性のヒエラルキーの下位周縁に身を置く者は汚れたものとして危険に晒される（Douglas 1966=2009, Rubin 1984=1997, Butler 1990=1999）。なかでも Humphreys(1970/75)は、男性同性間の性的な出会いのために集まる公衆空間に参与観察を行ったが、現場はヘイトクライムや警察の巡回の危険と常に隣り合わせであった。かれはこうしたリスクをむしろ方法論上に利用し、危機が迫った際に利用者に知らせる見張り役として参与観察遂行を可能にした。また、密かに後を追って家を突き止めアンケートの協力を求めるなど、倫理的な議論を巻き起こしたことはあまりに有名である。だがそれ以降、性の多様性に焦点を当てた研究の隆盛が近年生じている一方で、調査過程における具体的な諸問題の検討が著明に進んだとは言い難い。本報告は以下の事例をもとに、性を調査する中で生じたリスクについて考察する。

2 方法

性的少数者の集う街の中でも世界有数の規模を誇る東京「新宿二丁目」を中心として、さまざまな東・東南アジア地域にフィールドワークを行った自身の経験と、2012年から2014年に行った若年ゲイ男性10名、2015年から2016年6月現在継続中の壮年期以降のゲイ男性かつHIV陽性者約20名を対象に行ったライフストーリー調査をもとに、調査者のフィールドワークや調査対象となる日常生活の中で、リスクをどのように捉えてきたかを検討することで、調査におけるリスクについて分析した。

3 結果・考察

「文化は危機に直面する技術」(山口 2009:174)と言うように、性に関しても特定の下位文化を形作ることでかれらの生活を取り巻く危機に対応していると見ることができる。その代表的な例が「性的冒険主義」(Smith, Worth and Kippax 2004)である。これは「男らしさ」規範と危険を伴うセックスという行為が結びつき、変態(クィア)や侵犯、友愛の感覚を伴う快樂実践、具体的には集団セックス、薬物使用、野外プレイやSMなど「ハード」な文化実践を指す。こうして日々の生活で肉体的次元に限定したリスクに晒されコントロールすることを試みることで、より大きなリスクに対応していた。

ゆえに、リスクそのものが調査の対象とならざるを得ず、調査者はフィールドの中で常にリスクの再定義が求められることとなる。例えば性が制度化される度合いの低い場(公園や公衆トイレ、ホテルの一室や個人の部屋など)は常に危険と隣り合わせ(警察の職務質問、意図しない薬物使用や暴力など)である。路上を含め上記のような場を調査する者は、完全には不可能だがリスクの見積もりが予め必要となり、慎重に参入と撤退の決断を繰り返しながら徐々に研究を進めていくというスモールステップが求められる。倫理的な側面については特にプライバシーに配慮しなければならず、インタビューを行うには十分な説明と同意が必要となる。リスクが高いと判断した場合には、調査者は勇気を持って撤退し、代わりに現場での経験をもつ調査協力者のライフストーリーを通して理解するなど、幾つかの手法を組み合わせる方法内・方法間トライアンギュレーションを講じていく必要があろう。

文献

Humphreys, L., 1970/1975, *Tearoom trade: Impersonal Sex in Public Places*. Piscataway, NJ: Transaction Publishers.

Smith, G., H. Worth and S. Kippax, 2004, *Sexual Adventurism among Sydney gay men*. Monograph3/2004. National Centre in HIV Social Research (NCHSR). NCHSR, Sydney.

ほか